

## 亀崎潮干祭

祭は町と一体であり、祭はその町の生きた博物館である。半田市は1937年半田・成岩(ならわ)・亀崎の3町が合併し誕生した町であり、知多半島の中核をなす。太平洋に突き出した地形からくるものだろう、まち自体が海洋都市と呼ぶにふさわしい明るさと爽やかさを持っている。現在は中部国際空港(セントレア)を支える空の町でもあるが、江戸時代から醸造業が栄え、ミツカン酢という和食文化を代表する企業など地場産業は力がある。

半田市は江戸時代尾張徳川と犬山藩と寺社の領地であつたらしい。中でも亀崎は犬山城主成瀬の領地であつたことが犬山城を見て育った私には特に親しみを持つゆえんである。かつてこの祭を観覧中、酒に浮かれた地元の某氏から、これは昔おたくの殿様に金を貸した時の証文だぜ、と言って古くボロボロになった文書を見せられたことがあつた。

日本の伝統的な祭は氏神の神社が拠点であるので、たとえ名の知れた祭でもスポットの祭でしかない。また、重く大きな曳山は遠い距離を移動するわけにいかないから祭はその町のほんの一角に限定される。ところがこの半田市は違う。全市10地区に神事と伝統に則った氏神の祭が散在し、31台の曳山がほぼ均等にあり、3月下旬から5月上旬にかけてそれぞれが覇を競うように祭を繰り広げる。半田型と言われ、全国でも独特の重厚で、彫り物の卓越した素晴らしい曳山が充満する季節は、全市頭に血が昇る男たちの熱い町となる。ただし、半田では山車(だし)と呼ぶ31台の曳山の中で、5台を持つ亀崎潮干祭だけが国の重要文化財指定になりユネスコ文化遺産候補にもなっている。亀崎はこのことが無言のプライドなのだが、他地区はそんなこと祭の本質には関係ない事であろうこの微妙な心の確執が何ともはたから見ているとおかしい。私の関係する犬山祭は亀崎と同格であるから、口には出さねど、亀崎と同じ感覚の心地よさを持つからよくわかる。が、祭の世界はナンバーワンよりオンリーワン、おのれが世界一、唯我独尊でいいのだ。

さて、亀崎はかつて港町であり潮干祭というように海の男の祭だ。私は城下町の路地を軒屋根すれすれに曳山が巡行する陰影の濃い祭の中で育ってきたが、ここ亀崎の山車は日差しの照り返す蒼い海原と白い砂浜を背景に重量感のある山車が並ぶ。山車の屋根には漁船のような吹流しの旗がいかにも爽やかに皐月の風を受けてヒラヒラ翻る。砂浜に突っ込んだ山車を海の男たちが渾身の力を込め引き出す。山車が深く咬んだ砂の中を掛け声と共に徐々に徐々に前進する時、観客である私も思わず鼓動が高鳴り興奮を感じる。祭の醍醐味はこの男たちの無償で馬鹿馬鹿しいエネルギーの発散にあるという気がする。

日本民族はるか南方から渡ってきた海洋民族であるという説は、潮干祭をよく観察すると肯けるものがある。

